

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

《これまでのあらすじ》 兄、弟と小さい頃の思い出話をして「私」。以前、家族で行った店やそこで食べた鮎あゆのことが話題になった。話をしながら「私」は昔を懐かしみ、かすかな記憶をたよりにその店に行こうと思い立つ。訪れた土地で出会ったタクシーの運転手と会話がすすんでいく。

ちやうど向こうから来た空車に縋すがりつく気持きもちで手をあげ、恐る恐る道を渡って運転台をのぞくと、目つきの悪くない、制服姿の年輩の人だ。

「すみません。今来られたほうへ、車、引き返してもらえますか」

「そりや構まわんですが、この先、もうちよつと行かないと車は廻まわせないんで……」

「どうぞ。じゃあ、お願いします」

車の向きが変わって、座席からながめる制帽の下には、白いものがたくさんまじっている。しかもそれは、大分衰えている。

「どこへ行きなされる」

「このまま、できるだけ川から離れないで奥へ入りたいんです」

バックミラーの中の顔は、はじめ疑わしうであつたが、飛行場からまっすぐ来たという、しだいに同情的になり、協調的になり、

やがて□□になった。「川の水がこんなに少なくなつて……」と眩くらくと、「ちよつと停とめてあげよう」と、向こうも独りごとのように言う。

さつきまでは知らなかった人が、私のそばに立っている。並んで川岸から流れを眺めている。

「発電所に、どうしても水をとられてしまう。わたらのまだ若かつた頃には、ここを、帆掛舟ほかけふねがたくさん下つて行つたものだつたが……」

「向こうの川原のトラックは、砂利を運び出すんですか」

「そう。道があるから川が濁る。道がなくなれば川も澄む」

「さつき、鮎あゆの養殖場がありましたね」

「地鮎じあゆが減つて、この川でさえ、遠くの湖から稚魚なまこぎよを運んで来て放流するほどなんだから……」

「養殖のは、大きくて立派そうでも身がしまつていないし、第一苔こけの匂いがないでしょう」

「この魚ばかりは、肥ふつていちや駄目だ。うまくない。第一見た目がよくない。苔こけと言いなさつたが、あれは珪藻けいそうと言うんです。精悍せいけんでね、そのくせ上品としか言ひようのないあの魚のからだの色合は、珪藻を食べていればそのものですよ。一枚のお皿の中に、刃物を知らない全身がおさまつて、それがちゃんと絵になっている。たいして大きく

もないその一尾だけで、立派に食卓を支えることができる。それが鮎です。風格というのはあらそえないもんだ」

私は気づかれないようにそと隣りの人の横顔をうかがう。

再び乗り込んだ車が、相変わずあまり速度を上げないことにくらか安堵する。窓をいっぱいに明けているので、川音がよく入る。流れが大きくくねって、水の中にはじめて数人の漁姿を見た。

「釣ってるわ」

水に沈みきらない石の片側で、流れがいつせいに白波立っている。

段々畑のように、幾列にも波立っている。川に、蒼味がさしてきたように見える。どの釣り人も、膝から下を浸したままで竿を打ち返している。頼まないのに、車は、岸に寄って停つた。座席から、見ただけ見なさいということだろう。ありがとうとは言わないほうがいい。きつとこの先も、こんな調子で走ったり、停ったりしてくれそうな人と思われる。

「あれが鮎釣りでしょう？ 素人かしら。それとも本職の人でしょうか」

「やたらに水の中に入っていくのは、素人が多い。心得ている者は舟を使います。からだが大切だからね」

「誰でも、釣りたい時には、いつでも川に入れますか」

「鑑札さえ買いなさればいい。一年間は、釣る権利が得られます。

鑑札は漁業組合が発行するけれど、同じ川の中でも、砂利や石のこ

とになると、これは県の土木課の管轄になる」

どうも、普通の運転手とは様子がちがう。

「海だと、夜釣りがあるでしょう？ 鮎は、夜は釣らないですか」

「さつきも言ったように、鮎の食べ物、主に、石にくっついている珪藻でね、そいつはどうしても夜は見えにくい。大方は、昼間に群れて食っている。だから釣師も、昼間つき合うことになる。今あそこでやっているのは、友釣りといって、^{※4} 罎に鮎をつかう釣り方です。鮎に鮎のよく見える時間を人間も狙っている」

「鑑札で釣れるものは鮎だけですか」

「鯉、鰻、山女、それに鰻」

「生きていても、焼かれていても、私、鮎には^{※5} 鮎の葉がいちばんよく似合うと思うけれど……」

「ああ、鮎の葉はいい」

二人の車はまた走り出す。

川床の傾斜を知らせるように、流れが少しずつ音高くなり、肩を出したままで水に洗われつつける石も、それと見合うように、大きく角張ってくる。山の緑は、両岸に厚くなって迫り、天を指す杉木立を分けて、川は、しだいに溪流のおもむきに変わってゆく。このあたりだと、夜更けとはいわず、日が落ちればぐっと冷え込むに違いない。

追い越す車もなければ、擦れ違う車もごくまれでしかない道路

わきの、名ばかりのドライヴ・インで、ちよつと休みましようと言ひ出したのは私のほうだった。

隣りのガソリン・スタンドで、作業服の青年が、両手をさし上げて欠伸あくびをしている。

「この仕事に入る前は……」

一服すると、問はず語りに相手が話しはじめた。

「長年、鮎あゆを釣つて暮らしてましたよ。釣る、かける、なんてもものじやあない。向こうが釣られてくれる。かかつてくれる。ちつとも苦勞しないで仲間の三倍も、四倍もの漁dにうつつを抜かしておつた。近所では、ちよつとした名人扱いでね。ところが……」

「ところが……」

「ひよつこり釣れなくなった」

「鮎あゆがかからなくなった？」

「いいや、釣る気がなくなった」

「……………」

「前の日まで、いつものように、いい心持で釣つていたんです。そして自分の所※らいさすの生簀せいさいの中で、美しい姿で泳いでいる獲物をながめたり数えたりしていたんだけど、それが急に、自分のからだか鉛みたいに動かなくなつてしもうた。頭だけがじーんと冴さえている。それまで、一度としてそんなこと考えたこともなかったのに、突然、こんなにきれいな魚を、わしはよくもまあ、毎日毎日暮らしのために、という

気持きせきが起つて、それ以来、釣り道具に手も触れなくなつたんです」

西風にしが、急に南風みなみに変わったように、わしは釣師をやめた、とでも言いたいのか、この人は。少年の日に、急に蝶ちょうを追うのをやめた弟のことを思つた。私自身、長い間勤めていた会社を辞めようと思に決めた日のことを思つた。後になつてみれば、そうなつたもつともらしい理由はいくつかあげられる。しかし、そう思ひ立つた瞬間に限つて言えば、あれは、西風が、急に南風変わったとでもしか言ひようのない、他人に対しても、自分に対しても、説明しようのない一瞬だった。兄にも、むろん二た親※ふにも、私が知らないだけのそういう一瞬は幾度かあつたであらう。

「一年や二年の釣師の生活ではなかつたんでしよう」

「二十一年」

即座に答えはかえつてきた。

「鮎釣りはやめたが、この土地※ちからは未だに離れられないねえ」

「……………」

「ぼつぼつ、行きますしやうや。で、どうします、帰らないで、このまま、まだ奥へ行きなさるか」

私はもう、迷わずに答える。

「連れて行つて下さい」

「湖までも、行きなさるか」

「行きたい、です」

木立の奥のほうで、からだのあまり小さくはなさそうな鳥の声を
する。

車の窓を、半開きにした。

川の石は、石というよりも、もう岩である。

岩根に激しく碎ける水のすぐ傍に、穏やかな濤がある。※フとろ

眺望は険しく狭まつてゆくが、わずかながら、釣り人はどこまでもよく入っている。ふしぎに寄り合つて竿をさしかけている。

(竹西 寛子 『鮎の川』)

問6 ―部：「この土地からは未だに離れられない」理由を「私」はどのように理解しましたか。それを説明した次の文の（ ）に当てはまる内容を書きなさい。

運転手が、突然鮎釣りをやめようと思ひ立つた瞬間の理由は分かる気がする。しかし、土地から離れられないのは、結局（と）理解した。

15 ----

問8 本文の内容を説明した文として最も適切なものを、選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、運転手と話をすることで、過去を振り返り、懐かしい思い出にひたる「私」は、久しぶりに出来るだろう鮎釣りを楽しみにしている。

イ 長年鮎を釣つて暮らしていた運転手の話を聞いた「私」は、兄や両親にも自ら言ひようのない出来事があつただろうと考えている。

乗車した時から親しみをもち運転手と話を交わしていた「私」は、周囲の風景を見ながら、過去の思い出に心地よさを感じている。

工、長い間勤めていた会社を辞めた理由を運転手に説明した「私は、運転手の温かな人柄に感動し、新たな気持ちにあふれている。

注

※1 稚魚……魚の子ども。

※2 珪藻……川や湖に生息している藻。

※3 精悍……勇ましく、鋭い気性。

※4 友釣り……鮎の縄張りの習性を利用した鮎釣りの方法。

※5 生簀……取った魚を一定の間飼う場所。

※6 一た親……父親と母親。

※7 瀬……川の流れるやかで水の深い所。